

第三部理工系博士人材育成分科会（第26期・第3回/WG第7回）議事要旨

日時： 2025年9月5日（金） 17:00-18:00

場所： ウェブ会議

出席者： 伊藤由佳理、内田誠一、奥村幸子、尾崎由紀子、三瓶政一、関谷毅、高木周、常行真司、堀利栄、宮崎恵子、岸村顕広、関根千津

欠席者： 沖大幹、北川尚美、下田吉之、田村圭子

（敬称略）

1. 分科会第2回議事要旨の確定（資料2）

- 第2回議事要旨案を回覧済み。特に異論なく、確定版とし事務局へ提出。
- 前回欠席の岸村委員より「ライトな博士課程」についてその意図が説明された。およその内容は以下の通り。
 - 博士人材の裾野を広げる必要性から提案した。中小企業・自治体など多様な人材が博士課程的な研究に参加できる仕組みを想定するもので、正規の博士号取得が目的でない人にも研究参加の機会を提供すれば、リカレント教育的に活用可能と考えた。博士課程に至らなくても得た経験やスキルに価値がある。また、サーティフィケート的な仕組みも有効と考える。社会人・企業人との共同研究受け入れは、学生にとって刺激になりキャリアの多様化につながるという価値もある。一方、博士人材は質の保証が重要であり、「博士号乱造」には反対するものである。

2. 夏季部会での人材育成に関する議論の報告（参考資料1, 2）

- 奥村委員より、夏季部会にて行った本分科会の活動（課題・原因・施策の整理、エビデンスの収集状況）の報告があった。博士人材の必要性に関するグループディスカッションが実施され、その結果が骨子案に反映されている旨が説明された。

3. レポート骨子案について（資料3）

- 奥村委員より、レポートは「記録」として公開予定で、構成案は以下の通りと説明された。
 1. 日本における博士人材の現状
 2. 博士人材が有する能力
 3. 大学院博士課程の課題・施策（留学生・海外進学者の動向も要議論）
 4. 活躍の場における課題・施策（産業界・アカデミア・行政機関）
 5. 分野ごとの状況・取り組み例
 6. 博士人材がより活躍する社会を目指して
- 高木委員：機械分野では産業界進路が主流。国際的に活躍できる人材育成には「頭脳循環」が重要。産業界からのニーズをもっと反映すべき。
- 内田委員：博士の待遇改善の可否について、企業側から直接意見をもらうべき。
- 関谷委員：アカデミアと産業界では求める博士人材像が異なる。COCNと連携し、産業界の視点を取り込むことが可能。佐田委員が橋渡し役となり得る。

- 関根委員：これまでの調査と同じ内容の繰り返しでは弱い。新しい視点を盛り込む必要。博士号を持つこと自体に意味があるのではなく、「能力ある人材の中に博士がいる」という捉え方が重要。研究所だけでなく本社や事業部で要職に就く博士人材の事例にも注目すべき。
 - 三瓶委員：国際標準化団体・フォーラムなどで活躍する博士人材の実態調査が必要。
 - 堀委員：行政機関で働く博士人材の割合を日本と海外で比較すると有益。教育普及機関（科学コミュニケーション分野など）も活躍先として検討すべき。
 - 奥村委員：多くの意見を踏まえ、骨子案を修正する。欠席者からもメールで意見を募り、改訂版を作成予定である。
4. シンポジウムの開催について（参考資料3＝前回資料3 参照）
- 奥村委員：学術フォーラムとして2026年度4～6月の開催を検討。次回（11月）の分科会で具体案を提示予定。
5. その他
- 配布資料として尾崎委員提供の産学連携人材育成事例、日本工学アカデミー報告書（光石先生提供）を紹介。今後の分担執筆にあたり、必要に応じて追加資料を整理。
 - レポート骨子案は修正を行い、11月までに改訂版を作成する。産業界・行政・教育普及機関など多様な視点を盛り込む方向で調整。

今後の予定

- ・10月：骨子案リバイズ版をメールで回覧、意見収集。
- ・11月：次回分科会開催（日時調整）。骨子案最終化、シンポジウム計画協議。

以上

内田 記